

保育における人形・人形劇の活用 —幼稚園での実践をもとに—

山 田 裕美子¹⁾ 古 相 正 美²⁾

Applying Puppet Plays and Puppet Theater in Early Childhood Education —Practiced at Kindergarten—

Yumiko Yamada¹⁾ Masami Furuso²⁾

(2016年11月25日受理)

I. はじめに

これまでの研究において^[1]、人形劇の歴史に触れ、保育における人形劇についての可能性を熊田^[2]や松崎^[3]の研究を参考にしながら探ってきたが、保育に人形劇を取り入れるには保育者が環境を整えることや子どもが経験を積み重ねることが重要であることがあきらかとなった。実際に、保育の現場ではペープサートやパネルシアターなど、シアタースタイルの児童文化財が主流となっており、人形劇は人形を揃えることや保育者が演じるために練習をする時間を作らなければならず、忙しい保育の現場において取り入れることは容易ではない。しかし、人形による見立て遊びを通して、子どもは疑似体験や模倣をすることにより成長を重ねていくものであり、幼児期に人形劇を鑑賞することは豊かな感性を育て、想像力の発達を促し、子どもが人形劇を友達と一緒に演じることで、表現力や協調性を身に付けることができると考えられる。

そこで本研究では、子ども達が人形遊びや人形劇鑑賞を経験し、実際に人形に関わるとどのように変化していくのか、その表情や言動を観察し、これからの幼児にとって、また保育において、人形遊びや人形劇がどのような役割を担うのかについて考えていきたい。

II. 保育における人形・人形劇の実践

1. 人形遊び、人形劇遊びの実践

本研究では、実際に保育の現場へ人形劇を持ち込むと子ども達はどうか反応をするか、またどのような効果があ

るのかについて、中村学園大学附属あさひ幼稚園にご協力いただき、調査した。

あさひ幼稚園では、保育において人形を遣ったり人形劇を取り入れたりすることがほとんどない状況であるため、今回の調査では、始めに年中組において初めて人形劇と触れ合う体験をし、その後年長組になって人形劇遊びを体験した子どもが、どのように人形劇遊びを展開していくのか、その中で人形遊びや人形劇遊びが子どもにとってどのような効果をもたらすのかについて、長期的に調査をさせていただいた。

また、設定保育の時間を妨げないように、調査時間は登園後から朝の始まり前までの自由遊びの時間とし、人形を置いていただけでは子どもからの関わりが希薄であることがわかったため、客観性には問題はあるものの、筆者(山田)が保育者として子どもに関わることにした。

調査日程とその方法については以下の通りであり、この結果より考察を加えていく。

年中時

① 2014年11月17日(月) 18日(火) 19日(水)

調査時間 9:40~10:20

調査場所 年中A組

準備物 人形劇用の人形(男の子 キツネ 鳥 牛 亀 カブ) ビデオカメラ

(目的)

人形劇に親しみ、子どもに人形への興味を持たせる。

別刷請求先：古相正美、中村学園大学教育学部、〒814-0198 福岡市城南区別府5-7-1

E-mail: furuso@nakamura-u.ac.jp

1) 福岡こども短期大学非常勤講師 2) 中村学園大学教育学部教授

[1] 山田裕美子 古相正美「保育における人形劇の活用—その歴史と現状—」『中村学園大学・中村学園短期大学部研究紀要』第48号 2016 225-229頁

[2] 熊田武司「保育教材としての人形劇の普及方法—岐阜市保育協会研修会の参加保育士を対象にした調査から—」『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』第45集 2013 65-78頁

[3] 松崎行代「学校教育における人形劇の教育的意義と課題—飯田市の学校における人形劇活動充実のために—」『飯田女子短期大学紀要』第25集 2008 61-75頁

(方法)

初日は保育室の中央に、ピアノの椅子や園児椅子の上に人形を置き、その様子を記録。2日目にその人形を使用した人形劇（大きなカブ）を実演して子ども達に鑑賞させた。3日目、初日と同じように保育室に人形を置いてその様子を記録し、初日の反応との比較を行なった。

(結果)

初日

(表1)

時間	人形に関わる子どもの様子
0:00	保育者が人形を並べる。
0:03	男児 D、人形を見るが触らず去る。
0:04	男児 D が牛の人形の口元を触る。男児 F も尻尾を触る。
0:05	男児 D、鳥の人形を触って落とし、拾って元の場所に戻す。男児 F は笑いながら見ており、その横の男の子人形を眺める。
0:41	男児 F も牛の人形の傍に行き「これ何？」と牛の乳を指す。男児 D もやってきて「これはね、おちち」と言い笑う。男児 F は「違うよー」と言い、男児 D は「おちちだよー」と言う。 近くで遊んでいた女児 A、H がやってきて、女児 A が「可哀想だってー」と言い、女児 H が「そうだよー」と言う。 女児 A が「牛のしぼりはこうだって、優しくね」と言いながら、乳しぼりの見本を見せる。 女児 H が「触ったらだめって」と言い、女児 A が「そうだよ、写真の人がおいてくれたのに」と言う。 男児 D が「ここで遊ぼう」と言い、男児 F、M も一緒に人形から離れてままごとコーナーに移動する。
0:44	男児 D が鳥の人形を持ち出し、学生をつつく。
	男児 M が男児 D を真似て、学生をつつく。

初日は人形に興味を示すものの積極的に関わる子は少なく、人形に触れる時間は短かった。飾ってあるので触ってはいけないと思っているらしい女児がおり、人形を用いて遊ぶ姿はほとんど見られなかった。実習生がやってきた時に男児が人形を用いて触れ合う姿が見られた。

2日目

(表2)

時間	人形に関わる子どもの様子
0:04	人形劇開始
0:05	女児 A、演じ手に先生がいることに気づき「〇〇先生がいる」と小声で言っている。 人形が出てくると女児 A が「あ！ A 組にあった！！」と言う。 カブを抜くシーンではテーマソング「カブカブカブカブ白いカブ、でっかく美味しかったかな」と言う歌があり、何度も繰り返して流れる。
0:07	テーマソングを繰り返すうちに体を揺らしたり口ずさんだりする子も見られる。 カブが抜けないシーンでは笑いがおこり、後半になるにつれ笑う子が増えていった。
0:09	人形劇終了

2日目の観劇では、全員が人形劇に見入っていた。カブが抜けないシーンでは笑いが起こり、カブが抜ける時には男児が歓声をあげていた。担任が演じているのを見付けて小声で友達に伝えている姿も見られる。人形で見送ると、ほとんどの子どもが人形を触り、にこやかに退出していった。

3日目

(表3)

時間	人形に関わる子どもの様子
0:01	保育者（筆者）が人形を並べていると男児 F が「あのお人形、あのお人形！」と言いながら寄って来る。男児 N、女児 H も人形を触り、カブを持って「重たい、誰か・・・」と言う。男児 F が傍に寄る。 男児 Q、カブを持つ女児 H に「貸して貸して、一緒にうんとこしょ、どっこいしょやろー！」と言ってカブを持ち、取り上げる。
0:10	男児 M、R が人形を見に来る。男児 M は牛の人形を触りながら「何でこれ動かないの？本物じゃないの？」と言っている。
0:11	女児 T、U、人形を見に来る。女児 S が牛の人形をポンポンとたたいている。
0:12	女児 T、U、「カブカブカブカブ白いカブ～」と口ずさみながら去る。
0:31	男児 U、キツネの人形を持ち歩き、自分の紙飛行機を拾うと椅子に座り、紙飛行機をミルクに見立ててキツネに飲ませる。
0:32	男児 U、立ち上がりキツネの人形と紙飛行機を持って移動する。

3日目は人形を出すなり子ども達が寄って来る。早速大きなカブの模倣活動が見られた。劇中の歌を口ずさむ様子も見られる。「何でこれ動かないの？本物じゃないの？」と言う男児も見られた。キツネの人形に紙飛行機をミルクに見立てて飲ませる仕草をしている様子も見られ、手で触る程度の関わりであったのが、小さな座布団大の大きさである亀の人形の上に乗るなど、積極的に関わる姿が記録された。

(考察)

子ども達の中で保育室に置かれているだけの人形であったものが、人形劇を観劇したことにより、物語に登場した人形には感情があるように感じることから、より身近に感じる事ができ、親しみを持てるようになったと言える。また、観劇前に動かない人形を見ても反応しなかった男児 M が、観劇後には動かない人形を見て動かないことを不思議に思う様子が見られたことから、人形に命があると感じる体験ができたと推測する。

人形劇が始まると、子ども達は人形が動く姿に見入り、舞台から目を離すことなく人形劇に集中していた。カブが抜けるシーンでは歓声上がる等、人形の様子や物語を楽しんでいたことから、子どもにとって人形劇観劇は

物語に親しみやすく、楽しさや喜びを与えるものであると言える。

② 2015年1月13日（火）14日（水）

調査時間 9：40～10：20

調査場所 年中A組

準備物 人形劇用の人形（男の子 キツネ 烏 牛 亀 カブ）ビデオカメラ（14日のみ）。
13日は準備不足のためビデオ撮影失敗）

（目的）

子どもが人形を動かし、人形劇を演じる体験をすることにより、どのような反応が見られるかについて考察する。

（方法）

初日は人形の演じ方についてレクチャーし、音源に合わせて動かしてみる（動画撮影なし）。翌日、ホールにて実際に演じてみる様子を記録した。

（結果）

2日目

（表4）

時間	人形に関わる子どもの様子
0:36	人形劇1回目スタート
0:37	保育者、男児Sのサポートをしながら一緒に牛の人形を演じる。
0:38	キツネの人形には牛のお尻を持つように声をかけると、カブを引っ張るシーンではスムーズに演じてみせている。その後の立ち姿などはうまくいかない。
0:40	男児Fは登場のタイミング以外は自分で演じることができ、カブを引っ張る時も亀の上に鳥を立たせる等、前に観たことを再現している。エンディングでは、男児Fが亀も一緒に動かしている。台詞が終わって人形が手を振るシーンは舞台上の子は皆で手を振っていた。
0:41	演じ終わると机の下にしゃがむ。観客から拍手をもらう。演じてみたい子はステージに来るように保育者が声を掛けると、女児V、W、X、Cが上がり、担任と一緒に女児I、Yが上がる。保育者が「沢山練習したお友達に教えてもらってね」と声を掛け、動かし方をレクチャーする。
0:42	女児V、Cは二人で男の子、女児Wは牛、女児Iは鳥、女児Yは亀の人形を担当、キツネには女児T、X、Hが担当することになる。
0:44	人形劇2回目スタート 男の子の人形はスムーズに動かすことができていた。牛の人形には援助を要したので保育者が援助した。
0:45	キツネの人形は、女児Tが独占してほぼ一人で演じている。女児Hは保育者に「やめたい」と言って舞台から降りる。
0:46	亀の台詞で亀の人形の顔を動かせた女児Yは、保育者に褒められて嬉しそうにしている。
0:47	女児Iの鳥が出番になると、観客から「Iちゃん頑張ってる」と女児（？）が応援している様子。（音声のみ）

人形の動かし方についてレクチャーを行なった結果、保育者（筆者）との信頼関係もまだ築けていない段階なので、恥ずかしがる女児Qの様子が見られた。女児Tは保育者が動かして見せると次第に真似をして動かすことができるようになり、その表情もにこやかになっていった。また、何度も動かしていくうちに人形を使った表現ができるようになり、手を振る仕草やジャンプをさせる等、自分で人形の動かし方を工夫し、意欲的になっていった。2日目も女児Tは人形劇を演じることに意欲的になっており、ずっと男の子の人形を持っていた。他にも男の子の人形を遣いたい子がいたので、保育者が女児Tへ声を掛け、ようやくキツネと交代した。キツネは3人で演じていたが、女児Tの意思表示が強く、その独占力に負けて一緒に人形を遣うことをやめ、女児Cは舞台から降りてしまった。

翌日、練習をした子ども達がホールで演じると、観客の子どもの中には演じることに興味を持ち、レクチャーをほとんどせずに舞台へ上がり演じる子も見られた。

（考察）

人形劇としての完成度は低いが、子ども達は人形劇を演じる体験をすることができた。また、観客の子どもの中には友達が演じる様子を応援する姿が見られたり、演じようと意欲的になる子も見られたことから、人形劇は演じるだけでなく、観ることも子どもの心を動かすことができると言える。人形劇を演じた子どもの中には人形を離さない女児がおり、その人形を使いたいけれどあきらめた子どもが数名いた。取り合いになることも考えられたが、ここでは女児へ譲ることで争うことにはならなかった。ここには子どもたちの人間関係が如実に表れていると思われるが、普段の子どもたちの性格などを知る立場には筆者はいない。しかし、こうした葛藤が積み重なることによって互いを思いやる気持ちがやがて生まれてくるものと予想している。このような経験を重ねていきながら、相手を思いやる気持ちや気持ちを言葉で伝えることへの発達を促すと言える。

年長時

① 2015年7月8日（水）

調査時間 9：00～10：00

調査場所 年長A組

準備物 人形劇用の人形（へび 男の子 キツネ 烏）チャイルドブックジュニア6・7月号
チャイルドブックぷう8月号 絵本
付属品の既製人形（はるのきやべ、わんたくん）

(目的)

保育者(筆者)・人形に慣れ親しみ、年長時での調査において子どもが保育の中でより日常の姿で保育者や人形に関われるようにする。

(方法)

チャイルドブックジュニア7月号の人形が登場するページを人形を使って読む。読んだ後、2学期も人形が遊びに来ることを話しておく。

(結果)

人形と触れ合い、2学期の調査への導入として人形と絵本を持ち込み、子どもの様子を記録したところ、信頼関係の構築できていない保育者が人形で話しかけることにより、スムーズに心を開いて人形との会話を楽しんだり、動かしている保育者に話しかけたりする姿が見られた。また、保育者が人形をクラスの仲間に入れてもらいたいと話したところ、クラスの色の名札を作ってくれる姿も見られた。

(考察)

保育者が人形を用いて絵本を読むことにより、子どもは絵本の内容を人形と共有する体験をし、人形が登場する絵本の世界を人形と一緒に楽しむことができた。子どもが絵本に登場する人形が実際に目の前で動いている姿を見た時に、子どもの笑顔が見られたり、保育室にいる子ども達が集まってきた。これは、保育者が人形を遣わずに絵本を読む時と比較すると、人形は絵本の内容へ導入しやすく、絵本の世界へ入り込みやすくすることができると言える。また、人形を持たずに保育者が保育室で子どもと関わろうとする時よりも、人形を操っている保育者の方が子どもは警戒することなく親しみを持つことができていた。これは、人形が動いたり話しかけたりすることが、子どもの心を開き、またその人形を演じる保育者に対しても親しみを持つ効果があると言える。

② 2015年9月7日(月) 8日(火) 9日(水)

調査時間 9:00～10:00 (7日のみ9:00～9:50)

調査場所 年長A組

準備物 チャイルドブックジュニア9月号 チャイルドブックぷう9月号 絵本付属品の既製人形(はるのきゅべ、わんたくん) 指人形(くま)10体 ビデオカメラ 人形劇用の人形(キツネ、へび、男の子、カブ)(9日のみ)

(目的)

子どもが人形を遣って遊ぶことにより、どのような遊びが展開されるのか、また人形を遣ってどのような表現を楽しむのかについて調査する。

(方法)

初日は保育者が保育室の中央で手踊り人形2体を遣って会話をしている様子を見せたり、絵本を読むなどして人形で子ども達に話かけ、触れ合う。その後子ども達が興味を持ったところで、くまの指人形も子ども達が手に取れるように保育室の中央に配置した。2日目、3日も手踊り人形とくまの指人形を保育室に配置し、遊びの展開を記録した。年中時では、人形劇用の人形を遣ってホールで人形劇を演じる体験をしたが、人形劇用の人形は幼児が保育室で人形劇遊びをするには大きすぎて、子どもが自由に表現できない可能性があると考え、年長時では既製人形とくまの指人形のみで調査した。しかし、年中時に人形劇を観たことと保育者のことを覚えていた子どもからの要望により、最終日のみ人形劇用の人形を準備した。

(結果)**初日****(表5)**

時間	人形に関わる子どもの様子
0:16	男児E、「あ！大根の人だ！」(大きなカブのことを覚えている様子)「大根持ってきてよ～」と言う。
0:22	保育者、人形を置いているところへ座り、絵本を開く。
0:23	女児G、絵本の中のはるのきゅべの上にわんたくん人形を乗せて「食べた」と言う。 保育者、きゅべ人形を手にとり、「(絵本の中の)私を食べないでよー」と演じると、女児A、G、H、I、J、男児Hが集まってくる。
0:24	保育者がきゅべ人形を使って絵本の読み聞かせを始めると、女児A、男児Dが座って観る。
0:26	保育者がくまの指人形を出す。 男児H「へびは？へび」(前に持ってきたことを覚えている)と言う。
0:27	女児J以外みんなその場を離れる。 男児Dが人形に触りに来る。人形を渡すと手に取る。男児Fは気になってはいるのか、近くをうろうろしている。男児Hが保育者が持っている人形に触る。
0:29	男児Dが保育者へ人形の動かし方を聞いている。保育者がレクチャーをすると動かせるようになり「あ、できたね！上手！」と褒めると男児Dは嬉しそうに笑い、くまの指人形が何度もお辞儀をする仕草をして見せる。その様子を見て、女児Iもくまの指人形を手にして動かしてみる。
0:30	女児3人がくまの指人形を近づけて「仲間がいっぱいになったね！嬉しいね！」と遊んでいると、女児J、Lが寄ってくる。3人でくまの指人形でいないいないばぁなどをしてしていると女児Jも参加。他の友達に人形遊びを指さしてアピールして何かを伝えている。保育者がくまの指人形に名前をつけることを提案すると、男児Dが「僕はね」と言ってくまの指人形の顔を見つめ、「ゼロゼロ

	ゼロ」と言う。女兒Jは「ぺろちゃん」と言う。男児Dくま人形を持ち、立ち去る。
0:32	準備途中の女兒Oに声を掛けると「あとでやる！」「めっちゃくちゃ可愛いもん、だってめっちゃくちゃ可愛いもん」と言う。男児Fうろうろしながら様子を見ている。女兒Iが座って参加。保育者が「まだ名前が決まってないんだあ」と言う。と女兒Oが「リボンちゃん」「ほしくん」と提案して準備の続きをしに行く。
0:33	女兒I、J人形それぞれが持っている人形をくっつけてニコニコする。女兒I、J、保育者で人形をくっつけて遊ぶ（みんなで手を上に挙げて降ろすと、女兒Iが「バsshャーン」と言う。）男児Fが保育者の近くに座り、絵本（チャイルドブックジュニア）を読み始める。
0:35	女兒A、H、Kが部屋に戻って来る。女兒Kはすぐにくまの指人形を手に取り仲間に入る。ほしくん、りぼんちゃん、ハートちゃん等、人形の名前が決まる。
0:39	男児F、人形の数を数えたり、人形の周りをうろうろする。女兒Jが人形を職員室の先生へ見せに行きたい様子だったので保育者が「行っておいでよ」と声を掛けると、保育者も一緒に行くことになり、くまの指人形を持って移動。6体ほど部屋に残していった。
0:41	男児F、人形のそばで絵本（チャイルドブックジュニア）の裏表紙の迷路を見ている。その後、人形を眺めるが触らない。

初日は録画を開始してから保育者が人形を遣い始める前までの間、人形を触った子どもは一人だけで、登園してくる子どもは人形を見ることはあっても触ったり立ち止まったりすることはなかった。しかし、保育者が人形を手にする子ども達が集まってきて興味を持った。年中時に大きなカブを演じた様子を覚えていて、「あ！大根の人だ！」と言う姿や、7月に持ち込んだヘビの人形のことを覚えており、「ヘビは？」と聞いてくる姿が記録された。また、くまの指人形を用いた人形遊びでは、遊びのきっかけは保育者が与え、名前をつけて見立て遊びを始めたが、双子の兄弟や三つ子の兄弟と設定が展開していき、触れ合い遊びを楽しむ様子が記録された。女兒が先生方に人形を見せたいと意思表示をし、職員室まで移動する姿も見られた。

2日目

(表6)

時間	人形に関わる子どもの様子
0:10	保育者が「ここならお料理もできそうだな」と言うと、女兒Aが「小さいよ」「でも、作るのが高いよ」等と言っている。男児B「何が好物なの？」と保育者が持っているくまの指人形に聞く。保育者は「ホットケーキはちみつたっぷり」と答える。女兒Aが「でもはちみつないよ」と言うと、男児Bが「あ、でもロールケーキだったら・・・」と言う。保育者が「じゃあロールケーキ作ってくれる？」と聞くと少し笑う。男児Hが四角いトレーを保育者に差し出す。「これ何ができたの？」と聞くと「ホットケーキ」と答える。保育者が「やったー！」と言ってくまの指人形で食べる演技をする。「はちみつが足りないよ」と言ってみると、男児Hが追加で作る仕草をする。女兒Jとホットケーキを食べる遊びをしていると、女兒Iが「何しよーと？」と声を掛けてくる。保育

	者が「みんなでホットケーキを食べてるんだよ」と言う。と女兒I近くにある他のくまの指人形を集めてくる。女兒J、トレーを差し出して「どうぞ」と言う。保育者が「わぁ、はちみつたっぷりホットケーキ美味しそう！いただきます！」と言って食べる仕草をする。保育者が「ぺろちゃんのお顔にはちみつついてるよ」と言ってぺろぺろと何度も言っていると周囲の子が笑い、登園したばかりの女兒Bもその様子を見ている。
0:16	女兒J「あ、いいこと思いついた！」と言ってトレーにくまのベットに見立て、「ベットの船だよ～」と言ってくまの指人形を乗せたトレーを持ち上げる。女兒Iも真似をして一緒に空をとんでいる仕草をする。男児Cはその様子をみている。空を飛ぶ遊びはそのまま廊下へ移動。一周回って戻って来る。
0:29	滑り台を作ることになり、柵の段差に女兒IとJがまごとのシンクの蓋を立てかけ、滑り台遊びが始まる。長くしたい様子で「どうしたら長くなるかなあ？」と保育者が言うと、女兒Iがまな板を繋げる。くまの指人形がよく滑ったので、保育者がきしゃべ人形、わんた人形も滑らせると、男児Dがやってきた。
0:31	女兒Iがプラスチックトレーを持ってきて「これ、どうする？」と言う。男児D「ここに落ちる滑り台……」と言ってニコニコしていると男児Mに話し掛けられその場を去る。女兒B、I、Jの3人で箱やトレーを組み合わせ考えてながら滑り台を作っている。
0:32	女兒Jが「新しい滑り台できたよ」と保育者を呼びに来る。保育者がくまの指人形を「シュー！」と言って滑らせると、女兒Jは「ジャンプだ！」と言ってくまの指人形を高く持ち上げる。女兒Jはくまの指人形を持ったままお店屋さんごっこのコーナーへ行く。
0:35	ぺろちゃん（女兒Jのくま人形）はお店屋さんのコーナーでアイスを買って食べている。保育者もお店屋さんごっこのコーナーへくまの指人形を持って遊びに行く。女兒B、I、男児Fがお店屋さんの中で対応をしている。女兒Lが叫びながらお店屋さんごっこのコーナーへやって来て参加。女兒Lもくまの指人形の手にはめるが、動かし方がわからず保育者に聞く。保育者が動かし方を教える。女兒Lもくま人形にアイスを食べさせる。
0:42	男児Lが床に台とトレーを置いて滑り台を作る。「できたよー」と保育者に声を掛けるが、男児Dにトレーをまな板と取り替えられる。女兒Gも手伝い、斜面ができると男児Dがキャベ人形を滑らせてみる。男児Lはじっと見ている。男児Mも立ったまま見ているが、男児Dの近くに座る。滑り台はすぐに壊れてしまう。
0:43	女兒L、「ケーキが当たりましたよー」とくまの指人形を使って保育者に声を掛け、積み木のケーキを渡すとまたお店屋さんのコーナーへ戻る。
0:44	男児Eが「くま多すぎるやろ」と話し掛けてくる。自分の妹について話を始める。
0:45	女兒J、L、お店屋さんから何か食べ物（積み木）を買ってきてくまの指人形に食べさせる。
0:46	女兒J、くまの指人形でお買い物をする。
0:50	保育者、男児D 考案のくじおとしゲームにくまの指人形で参加する。女兒J、くまの指人形でくじ落としゲームの挑戦する。うまく落とせたので保育者が「やったね！やったね！」と人形で触れ合う。男児Dからようかん（積み木）をもらう様子を男児Lが見ている。
0:59	男児F、くまの指人形の手にはめて積み木を食べさせる真似をし、保育者の頭を食べる振りをする。

2日目はくまの指人形による遊びが主体的に発展していき、ホットケーキを食べていたくまの指人形が空を飛ぶ、発熱する、滑り台を作り滑らせる、と発展した。そ

こへ別の遊びをしている子ども達が滑り台作りに合流したかと思うと、ままごとコーナーへくまの指人形を持ち込み、お客さん役となってアイスを食べていたり、くじ引き屋さんがくまの指人形へ商品を届けに来たり、と個々での遊びが交流し、室内中の子ども達が人形と関わる遊びを楽しんだ。

3日目

(表7)

時間	人形に関わる子どもの様子
0:00	男児L、へびの人形を手にはめる「上手に動かせるようになったね」と保育者が話し掛けると、へびの人形で男の子の人形にかぶりつく動作をする。
0:03	男児L、くまの指人形を袋から出す。
0:08	保育者、男児Jにくまの指人形で「おはよう」と話し掛けると、男児Jはくま人形にタッチする。
0:11	男児J、キャベ人形を手にして「はるのきゃべつて?」と言い、人形を置いて去る。男児Lが「はるのきゃべつ、はるのきゃべつ」と言い、ままごとコーナーから降りてきて「はるのきゃべつを・・・見てて」と言って手で鉄砲の形を作り「パン!パン!」と撃つ真似をして見せる。保育者が「ひどいひどい」とくま人形を使って言うと、保育者のところへ来てくま人形も撃つ。「やめてよー」と言うと、指でくま人形の顔をはじいたり、耳元で奇声を発したりする。
0:12	くま人形を手にとり、保育者の元へ。保育者が「仲間が増えた!わーい!」と言うと男児Lはくま人形で頭突きをする。保育者が「ぎゅー」「仲良し仲良し」等と声を掛けるが、攻撃的な接し方はあまり変化しない。
0:14	男児L「そうだ、もうひとつつけちゃお」と言ってくま人形を両手にはめる。「仲間が増えた!楽しいな!」と言いながら人形を左右に振ると、男児Lも真似をする。「ジャンプ!」と言うと一緒に同じ動きをし、笑顔が見られる。
0:15	男児Lがくま人形をもう一体持ってきて「これもつけて」と保育者に渡す。
0:16	男児L「一緒に大大ジャンプしよう」と言い、2回ほど一緒にジャンプをするが、続かない。「手が暑くなちゃった」と言って人形を外す。男児L、へび人形を手にはめる。(以後撮影不能)

最終日は一番に登園していた男児Lとしばらく関わり、その後は室内で遊んでいる男児D、F、Mも人形遊びを楽しむ結果となった。男児Lは昨年度の人形劇で使用した人形のことを覚えており、「鳥は持ってきてない?」と発言するが、人形に対して攻撃的で、遊びの展開も人形を銃で撃つ、人形が毒蛇にかまれる、人形の首を絞める、人形の顔を壁に押し当てる、蛇を振り回す、カブの葉をちぎろうとする、男の子の人形の髪の毛をむしる等の行動が見られた。その都度優しく触れるように声を掛け、人形にも命があることなどを話したり、いたわる仕草をすると、少し優しく接するが、すぐに荒い行動に戻る。「もうお人形の村から幼稚園に行きたくないって言うかもしれないよ?もうボブちゃんは来ないかもしれないよ?」と声を掛けると、「秘密基地にきてもいいよ」と人形へ話しかけていた。この日は女児が人形遊びに参加し

ていなかったためなのか、以前から人形に対して興味を示していた男児数名による人形遊びが展開される時間が長く続き、人形を使った見立て遊びを楽しんでいた。後半になり、女児J、Oが登園し、女児Jは準備が終わるなりすぐにクマの人形を遣い始めた。

(考察)

人形を置いておくだけでは子どもが人形と関わる事がほとんどなかったことから、人形遊びが定着していない場合は保育者が遊びのきっかけを作らなければならないことがわかる。このことから、保育において導入は欠かせないことがわかる。また、人形遊びは主体的に展開したことから、保育者は主体的な活動を子どもと一緒に遊びながら見守り、寄り添うことが子どもの遊びの発展を促すことへ繋がると言える。男児Lについては、環境によって落ち着いて過ごせたり乱暴に振る舞ったりとその様子に変化することが窺えた。保育者と人形で触れ合う中で男児Lは人形へ攻撃的に関わっていたが、人形遊びを展開していくうちに男児Lから保育者へ声を掛けてくるようになった。攻撃的な関わりをしている時の男児Lは、攻撃する様子を保育者が見ているかを確認しているようであったが、くまの指人形を保育者と一緒にジャンプさせる遊びをした時は人形を見つめ、笑顔をみせていた。このことから、保育者が男児Lと人形を用いて関わりながら触れ合うことにより、男児Lが保育者や人形に親しみをもち始めたと言える。また、外遊びから戻った女児達がすぐに人形を使い始めたことから、この期間にくまの指人形と触れ合った経験から人形へ親しみをもちつことができたと言える。

最終日には、女児のいない室内において、これまで人形遊びに消極的であった男児が人形遊びを楽しむ様子が見られた。女児が遊んでいるのが楽しそうに見えたのか、女児がいる間は女児が遊びを主体的に展開するので一緒に遊ぶことを避けたのか、理由ははっきりとは言えないが、女児が遣っていない時間に男児が人形遊びを楽しんだことは、子どもが遊びを選択する際には自分が遊びたい物で遊ぶ場合だけでなく、遊びたい人と遊びたい物で遊ぶ場合もあることから、人間関係が関与していることも窺える。

③ 2015年10月26日(月)～29日(木)

調査時間 26日9:15～10:30 27日9:00～10:00
28日9:00～10:20 29日9:00～10:30

調査場所 年長A組

準備物 人形劇『金の斧と銀の斧』セット(くまの木こり人形2体、くまの泉の精人形1体、家2つ、泉、斧4本、舞台用布)く

まの指人形5体 ビデオカメラ

(目的)

主体的に人形劇遊びを楽しむことにより、人形で感情を表現したり工夫して演じたりすることが、子どものどのような発達を促す効果に繋がっていくのかについて調査する。

(方法)

初日は、保育者2名（筆者と大学院生）によるくまの指人形を使ったテーブル人形劇『金の斧と銀の斧』を鑑賞させ、テーブル人形劇に親しみ、興味を持たせた。（表8では、筆者は保育者A、大学院生は保育者Bと表記する）その後、鑑賞した題材を、人形を使って模倣してみる様子を記録した。2日目以降は子どもが主体的に行動する様子を記録し、保育者は活動の援助を行った。研究計画当初は28日までの3日間の調査予定であったが、人形劇の小道具作りに熱中し、演じてみる時間がなくなってしまったため、子どもからの継続したいという要望もあり、園へ相談した結果、29日まで期間を延長してもらい、その様子を記録した。

(結果)

初日

(表8)

時間	人形に関わる子どもの様子
0:00	保育者A、Bがくまの指人形を使ったテーブル人形劇『金の斧と銀の斧』を演じて見せる。
0:11	女児J、Nがやってきて、くまの指人形を手にはめる。保育者Aが「僕たちの人形劇どうだった？」とくまの指人形で尋ねると、女児Nが人形を動かしながら「面白かった」と言う。
0:12	女児H「ねえねえ、何してるの？」と声を掛けてくる。保育者Aが「一緒に人形劇しない？」と言うと頭を横に振る。しかし、演じている様子を見ていて「仲間に入れて」と言い、くまの指人形を手にはめて参加する。女児Hが「やってみる。恥ずかしいけど」と言うと、女児Nが「私恥ずかしいくない、姫がやりたい」と言う。女児B、様子を見ていたが保育者Bにくまの指人形を渡され、手にはめる。女児Hが「全然動かしきれない、人形なんて動かしたことないから」と言うと、隣で女児Bが動かして見せ、女児Hの顔の前に突き出し、脅かす仕草をする。女児Hが喜んで逃げ、女児Bが追いかける。女児H「ねえねえ、どうやってやるの？うまく手が入らない」と保育者Aに聞いている。女児Bは「こうだよ」と動かしてみせている。
0:16	女児H「ほら見て！パチパチしてる」とくまの指人形を動かして見せる。女児Hが女児Nに台詞を教えている。
0:19	保育者Bと女児Nがくまの指人形で演じていると、女児Hが「お礼にキスをあげましょう」と保育者Bの人形にくまの指人形でキスをして見せ、「キスしちゃったー！！」と言ってはしゃぐ。女児Nがくまの指人形を手にはめる。保育者に使い方を聞く。「じゃあ始めるよ」と保育者Aに声を掛ける。

0:20	配役を話し合う。女児Nは「私これやるから」と泉の精の役になる。保育者Aが「青の悪い木こりの役は誰がする？」と聞くが、女児H、Jが「やだ！」と言う。保育者Aが青衣装の悪い木こりの役を担当することにし、女児Jは赤衣装の良い木こりの役になった。
0:21	人形劇スタート。男児Fが笑顔で様子を見ている。
0:28	2回目人形劇スタート。
0:35	「おしまい」と言う。「もう一回したい！もう一回したい！」と言って配役交代を始める。女児Gが「今度はみんなで台詞言ってみよう」とみんなに声を掛ける。女児Bが「うん、いいよ」と言う。
0:40	3回目人形劇スタート。女児Cは良い木こり、女児Iは悪い木こり、女児Bは泉の精（黄色衣装のくまの指人形）、女児Gはサポートを担当。女児Gがカウントダウンをして始まる。演者のうち、女児Bはしっかりと台詞を言うが、他の二人は台詞を言えず、保育者Aが代わりに台詞を言う。
0:45	3回目人形劇終了。女児Gが「カットカット」と言ってビデオカメラ（保育者B）が一旦撮影を止めた。
0:47	4回目人形劇スタート。女児Gは良い木こり、女児Bは悪い木こり、女児Fは泉の精、他に女児C、I、Kも参加しており、小道具等のサポートをしている。女児Gが「みんなでむかーしむかしから言おう」と声をかけ、一緒に「むかーしむかし、あるところに」までは言えたものの、先が続かない。「二人の木こりがいました」と保育者Aと女児Bが言う。「自由に台詞を言っていよいよ」と保育者Aが声を掛けると、女児Bが「今から木を伐りに行こう」と台詞を言う。場面転換になると男児Jが池を下げるのを手伝った。女児B、「いいえ、違います。気を伐っていたら落としてしまったのです」と自分で台詞を言うと言保育者Aの方を見て笑う。保育者Aが「おしまいの時はみんなで人形を持ってさあ……」と言うと3人とも人形を持ち、声を合わせて「おーしーまい！」と言った。
1:00	女児G「もう一回やりたい！」と言う。女児Kが「違うのやりたい」と言うので「他のくまちゃんも使っていから、みんなでできる何か違うお話を考えてみたら？」と保育者Aが提案すると、話し合いが始まった。女児K「ももたろう！」女児H「ももたろう？」女児B「ももたろう！」女児G「いやだ！ももたろう」女児H「いやだー」女児B「いやだー」女児I「いやだー」女児G「いやだー」女児H「ねえねえ、ちょっといい考えがあるんだ。かぐや姫はだめ？」女児F「そしたらさ、かぐや姫の絵本をみながらにしたら？」女児K「見たことないのに言うなよ」女児G「やりたい！見たことあるもん・・・」女児F「見たことないけど観たい」女児H「じゃあ、絵本持って来ようか？」女児K「持ってこんでいい！もってこんでいい！」「かぐや姫人おらんやん」女児F「じゃあ手伝おうか？」女児K「いや、いい！」女児B「じゃあもう一回やる？」「家出して、家」と言ってようやく準備再開。女児I、Kが家を出す。（5回目省略）
1:07	6回目人形劇スタート。女児Gは良い木こり、男児Dは悪い木こり、女児Cは泉の精、他に女児Aは小道具等のサポート。観客は舞台の前に女児が2名いる。声は小さいが、自分達で台詞を言い、保育者のサポートは必要なくなった。女児Gはふざけて演じるが、演じている子ども達は笑っている。女児J、くま人形を取り、手にはめてどこかへ行く。
1:17	(以下「かぐや姫」の劇の準備をしていくが省略する。)

初日、登園するなり子ども達は興味を持って寄って来た。くまの人形を使ったテーブル人形劇を観劇すると、演じることに意欲を示す姿が見られた。役を交代しながら何度か演じるうちに台詞も覚えて言えるようになっていった。慣れてくるとアドリブでふざけて演じる姿も見

られるようになる。女兒ばかり6人くらいで話し合いながら人形劇遊びを楽しんでいる様子だが、観客が増える
と表情が硬くなり、それまでのように自由に表現できなくなる場面も見られた。以前から興味はあるものの女兒
の中に入れず参加できなかった男児へ声を掛けてみると、
次の回から仲間に入ることができていた。「違う劇もしたい」と言い、オリジナルを作ってみるように話すと話し
合いはするものの形にはならない。しばらくすると女兒
2人が画用紙を緑に塗って竹を作り始める。かぐや姫を
演じようと準備をしている様子であったが、自由遊びの
時間が終了となり、続きは翌日となった。

2日目

(表9)

時間	人形に関わる子どもの様子
0:00	保育室が卒園写真撮影で9:30まで使用不可能となったため、保育者が未就園児クラスへ出張公演することを提案してみると、女兒B、F、Gが名乗り出た。
0:15	未就園児クラス移動して舞台を設置し、人形劇練習スタート。女兒Fは良い木こり、女兒Bは悪い木こり、女兒Gは泉の精を担当。カウントダウンをするように促し、「むかしむかし、あるところに二人の木こりが住んでいました」と保育者が言うと、女兒Fが「木を伐りに行こう」、女兒Bが「そうしよう」と自発的に台詞を言う。 場面転換は女兒Gが積極的にするが、その後の台詞が続かず、ナレーションと台詞を保育者が援助する。女兒Gが泉の精が出ると保育者を見ながらも「あなたはこの泉にいたずらをしましたね」と台詞を言う。女兒Fは台詞を言えずにいたので、保育者や女兒Gが援助する。女兒Gが「あなたが落としたのは、この金の斧ですか?」と言うと、女兒Fは「いいえ、違います」と台詞が言えた。斧を全部渡す場面が難しく、女兒Gが「ちょっとお待ち下さい」と観客に言う。 保育者が「悪いきこりは嘘をついたので自分の斧も返してもらえませんでした」と言うと、女兒Gが「せーの」と声を掛けると、3人で人形を前に出し、声を合わせて「おーしーまい!」と言った。
0:19	未就園児クラスの先生と子ども2人が拍手をしているが、多くの子どもはぼかーんとしている。ぼっとした様子の3人。女兒Fは「手が暑い〜」と言っている。
0:20	未就園児クラスの先生が「お姉さん達上手でしたね〜」と言うと女兒Gが「今度は本番です!」と言って手を腰に当てる。未就園児クラスの先生が「練習だけでも面白かった」と言う満足気な表情をする。 (その後本番となり、途中小道具の出し入れ等で戸惑う場面もあったが、台詞は保育者を頼らずに子どもだけで言えるようになり、無事に人形劇を演じた(中略))
0:25	女兒Fが「あなたにあげるものは何もありますん」と言うと、女兒Gは「せーの」と言い、3人で「おーしーまい」と言った。
0:26	拍手をもらい、未就園児クラスの先生が子どもに「どうだった?」とインタビューをしている。「楽しかった」と女兒が答えている様子。
0:27	男児2名が舞台の側に来て人形を触る。
0:28	観客から「ありがとうございました」と言われ、「どういたしまして」と答える。

0:35	部屋に戻るとかぐや姫の小道具作りをしていた。女兒Aは山を青いペンで塗っており、女兒H竹を緑のペンで塗っている。女兒NとHが竹の工夫をしていたが、途中で別の用事を思いだす。女兒Aが山を立てられるようにしたものを見せにくる。(中略)
1:05	男児Dが「キーン、はい、もう熱は下がりました」と言ってくる。女児Aが「おはなしいつするの?」と声をかけてきた。女児の中にはくまの人形に頬ずりをしている姿も見られた。

翌日、女兒3人が未就園児クラスにて人形劇を披露した。練習後に3人を呼び、感想を聞くと「台詞が難しかった」「黄色(泉の精)なら言えるかも」「次は赤がいい」と役の交代交渉が始まっていた。その後の本番では、時折茶化したりおどけて見せる場面はあったものの、子どもだけで台詞を言って演技をしており、3人とも流れを把握し小道具の出し入れも子どもだけで行なうことができた。もう少し演じたそうにしていたが、未就園児クラスが片付けの時間となったため、撤収となる。保育室に戻ると、女兒2人が自由画帳を竹や山の形に切り、色を塗る作業をしていた。男児にも人形を2体を持って遊ぶ姿が見られ、「おはなしいつするの?」と声をかけてきた。女児の中にはくまの人形に頬ずりをしている姿も見られた。

3日目

(表10)

時間	人形に関わる子どもの様子
0:06	女兒C、I、絵本コーナーへかぐや姫の人形を探しに行く。保育者が「今ね、かぐや姫の絵本を探しに行ってもらってるんだ」と言うと、男児E、女兒Hが口々に「あるよ」と言う。女兒Hは「取りに行ってもらってるの?」「かぐや姫に出てくるお人形何人いる?」と言うと、しばらくして女兒Hが「8人」と言う。
0:12	男児Dがくまの指人形を見ている。女兒Bが人形の数を数えている。女兒C、Iが絵本を借りて帰ってくる。「やったー!おかしー!」と保育者が言う。二人はにっこりしている。男児Eが「かぐや姫2種類もある」と保育者に言う。女兒Cは男児Eに「3種類だよ」と教えている。
0:15	絵本を見ながら女兒C・I・B・Hが参加して「かぐや姫」関連の小道具作りに取り組んでいる。(詳細点省略)
0:23	保育者が「何か作ろうか?何を手伝ったらいい?」と聞くと、女兒Iが「これ作って」と絵本の月へ帰る雲を指す。保育者が「えー、大きい紙がいるね」と言うと、女兒Cが紙を探しに行く。 男児Dがくまの指人形を手にはめ、こっそり机の下に隠れ、「でーでーでーでーでーでー」と言いながら机の下からくまの指人形を登場させてみた後、保育者のところへやってくる。
0:24	保育者が男児Dに「5人の若者の役する?」「結婚して下さいって言う役する?」と言うと、男児D首を振る。女兒Hが「恥ずかしそうだよ」「相手Nちゃんだよ」と言う。保育者が「でも5人いるんだよ」と言うと、「MくんとかFくんとか入れたらいい」と言う。「あ!今Fが来た!」と男児Dが男児Fのところへ行く。

0:25	女兒Cが保育者に画用紙を渡す。男児Dが男児Fを誘っている。男児Fが「いいよ」と言い、男児Dは「Fいいって。あとMちゃん」と言って男児Mを探しに行く。
0:32	男児Nがくまの指人形を手にはめて男児Fに見せる。男児Fもくまの指人形を手にはめ、二人で触れ合っている。男児Fが「おすもうをとろう」と言って演じ始める。男児Dもくまの指人形を持って見ている。男児Fが「のこったのこった」と言っている。女兒に「ちょっとー、くま持っていかないでー」と言われる。保育者達に注目され、二人の相撲は中断したが、男児Dが「はっけよい、のこった！」と言って自分が持っている2体で相撲遊びを始めた。その人形の帽子が脱げると男児Fが「あ、木こりの帽子がはげてます」と言う。2体の帽子が脱げたので、男児FとNは自分のくまの指人形に帽子を被せた。その様子を女兒Aが見ている。保育者が「そうか！そうしたらいいね」と言うと、女兒Aが「おじいさんとおばあさん」と言う。
0:33	女兒Jがくまの指人形を両手にはめ、保育者の前にやってくる。
0:38	「あ！くまちゃんが1体しかない」と言う男児Fが人形を1体持ってくる。男児Nからも1体もらい、女兒Bが3体抱えて他のくまの指人形を探しに行く。女兒K、赤い帽子を深く人形に被せて「目が見えない」と言っている。男児D青衣装のくまの指人形を持ってうろうろしている。
0:44	女兒B「あと5分しかないよー！」と言う。「どうしようか？」「次はいつにしようか？」等と保育者が言っていると女兒Cが「11月はいつ来るの？」と聞いてくる。
0:48	女兒B「できたよ！帽子もう一個！」と言って保育者に見せる。女兒B「あーもう10時になってしまったー！おかたづけー！」と言う。

3日目、本格的に「かぐや姫」を演じる準備が始まる。女兒とかぐや姫の人形劇をする話から「かぐや姫の絵本借りてくる！」と女兒2名が絵本を借りに行く。絵本を見ながら必要な道具を考えて揃える様子が記録された。「竹」「若者の帽子」「小判」等は自主的に作れるが、「真珠の実がなる木」や「月へ帰る時の乗り物」等の小道具には積極的に取り掛かろうとしない。「真珠の実がなる木」は木の幹や枝を作って提示すると、男児が色を塗り始め、それを見ていた別の男児が自発的に手伝い始めた。「月へ帰る時の乗り物」も同様に土台作りを援助すると、女兒が紙で装飾を作り始めた。途中、人形遊びを楽しむ姿も見られ、男児3人がくまの人形で相撲の模倣をする様子が見られた。小道具作りに時間がかかり、演じる時間はなくなった。準備が終わらないまま片付けとなったので、担任へ相談し、翌日の午前中まで調査をさせてもらうことになり、子ども達へ保育者が翌日も来ることを話して片付けをした。人形や小道具を置いて帰り、子ども達に保育者が不在である午後の自由遊びの時間に小道具作りの続きをしても良いことを伝えしたが、担任の話によると、小道具作りの続きをする子はいなかったとのことだった。

4日目

(表11)

時間	人形に関わる子どもの様子
0:05	女兒Jが月を作り、女兒Cが絵本を見ながら刀を作っている。
0:10	月を作り終えた女兒Jが「そうだ！どうせならチケットも作ったら？」と言って作り始める。
0:15	保育者が画用紙で天女を作っていると、女兒J・女兒Cが注目する。切った天女を広げていると女兒Iがやってきた。5人つながった天女をみて女兒Cが「知っとうよ、できるよ」と言う。
0:30	女兒Cが女兒Iと女兒Hにくま人形を近づけて剣をつけたことをアピールしている。男児F小道具の前に座り、自分が作った木を持ち上げている。男児Nはその様子を見ている。男児Fは床に座りペンで色塗りをしている。
0:33	女兒Jが「今12枚！」と言う。女兒Cが「渡してくる」と言う。女兒Lを誘い2人でチケットを持って部屋を出ていく。
0:37	女兒Hがやってきて、保育者に「私、これ（かぐや姫）やっていい？」と言う。男児Fが戻ってきて、保育者に天女と乗り物を持ち話をしている。
0:39	女兒Hが女兒Lに動かし方を教えている。「お父さん指と赤ちゃん指を右手と左手に入れるの、わかった？」と言っている。男児Lが「おじいさんやってよー」と言い、男児Fを赤いくまの指人形を動かしながら追いかける。
0:42	女兒Lが「こんにちは、掴みましょ」と言ってくまの指人形でテーブルに敷いている布を掴もうとする。女兒Hはくまの指人形で「こらこら」と合の手を入れる。「掴みましょ、掴めない」とリズムよく繰り返して言っている。
0:43	女兒H・I・L男児Fが机の下にしゃがんで、色々な話を作って遊んでいる。
0:45	男児Fが竹を5本右手で持つと「むかしむかし、あるところに」と言い始める。保育者が台詞の続きを言い、男児Fがおじいさんを左手で登場させて動かしている。女兒H、Lが注目して男児Fのところに寄ってくる。女兒L・Hがふざけているが、徐々に準備が整ってくる。
0:48	女兒Cが「どうやってやる？」と保育者に声を掛け、「最初竹をさぁ……」とアドバイスをしている様子。保育者が最初の場面の説明をしていると、男児Jも起き上がって聞いており、青衣装のくまの指人形を手にする。女兒Jが「テープで貼ったら？」と言う。男児Jは人形を舞台に置いて去り、工夫が始まる。ふざけて別の話をする子ども達もいるが、保育者の誘導などにより、段々と工夫して舞台などが整ってくる。（詳細点は省略）
0:55	保育者がナレーションをし、かぐや姫の人形劇が始まる。男児Fはおじいさん、女兒Lはおばあさん、女兒Hはかぐや姫を担当する予定だが、女兒Lが見当たらない。ギリギリまで女兒Hが「おばあさん！」と呼ぶが戻って来ないまま始まった。舞台裏には女兒A、C、J、も隠れている。
0:56	おばあさんの出番になり「おばあさん役ー！」と女兒Hが言う。女兒Cが赤衣装のくまの指人形を女兒Aの前に置くと、女兒Aはテーブルの上に置いた。女兒Lは花の水やりへ行ったと聞き、男児Fが両手にくまの指人形を持って演じる。
0:57	場面転換になり、女兒Cが竹と小判を下げる。女兒Hは保育者に人形に帽子を被せるように頼みにくる。「5人の男の人たちが出てくるよ！どうする？」と保育者が言うと男児Fは慌てて若者役のくまの指人形2体を手にはめる。女兒Bが「私も手伝おうか？」とくまの指人形を手にはめる。女兒Cも両手にくまの指人形をはめる。女兒Aは月に帰る乗り物と山を持って座っており、女兒J

	は天女を持って座っている。役者が観客をもつとめたりしている。(詳細省略。)
1:02	男児 E が「片付けだよー」と保育者に言う。女児 G が「えーこれやりたいー」と言う。保育者が「じゃあ急いで最後までしよう」と言う。(詳細省略)
1:07	保育者が援助し、女児 A と最後の台詞を読む。みんなで「おしまい」と言って拍手をする。女児 F が「みんな、終わったらみんな出てきておしまいって言うんだよ」と言う。保育者も賛同する。
1:08	仕切り直して全員で「おーしーまい」と言う。女児 F が「っていうか、なんで私がするの?」と言ってくまの指人形を女児 H に渡す。

4 日目は観客がいることを想定し、チケットを作成することを思いついたり、舞台をどちらに向けたらよいかなど、演じるためにはどうすればよいのかを考える姿が見られた。途中、女児 2 名が遊びの中で、かぐや姫がおばあさんを川に落とすという寸劇を楽しむ姿が記録された。また、人形劇遊びの他にしたい遊びがあり、遊びを掛け持ち自由に出入りする姿も見られた。演じる場面では、保育者が助言をしながら進めていったが、求婚するシーンは 5 体の人形がベコベコと頭を下げる様子が面白く、観ている女児が大笑いしており、かぐや姫が月へ帰る前のシーンはかぐや姫役の女児が号泣を演じ、おじいさん役の男児も一緒に号泣を演じて観客を笑わせていた。この男児は小道具を立たせる工夫をしたり、女児に演技指導や、小道具作りへのアドバイスをする姿も見られた。

(考察)

テーブル人形劇を観劇する子ども達は人形劇に見入っており、登園準備途中の子どもも立ち止まって見ていたことから、やはり人形や人形劇は子どもの興味を惹くものであり、子どもが人形劇を見ている表情は明るく、笑顔も見られたことから親しみやすいものであると言える。また、すぐに模倣活動が行われ、回数を重ねると台詞も自分で言えるようになったことから、言葉でイメージを表現しようとする力を発達させることができたと言える。人形劇遊びをする際に、観客を想定したり、演じて見せる時に観客を意識したりする様子から、子どもは人形劇は観客の前で演じるというものと認識していることがわかった。そのため、演者となって演じることを楽しんだり、舞台裏で小道具の出し入れをして演者以外の役割を見つけたりとといった人形劇遊びを楽しむだけでなく、その人形劇遊びを観客になって楽しんでいる子どもの姿が見られた。この観客になって友達が演じている姿を観ることは、主観的だけではなく客観的思考をも発達させることへ繋がると言える。更に新しい話を演じてみたいという意欲が湧き、準備をする様子からは、物語への興味や関心をより一層深めることができたと言える。実際に、かぐや姫の物語を演じたい気持ちから、絵本を

何度も見たり読んだりして、登場人物や小道具を絵本の世界に近づけるために工夫をする姿が見られ、演じる際には、物語の世界を楽しみながら、遊びを発展させていった。

また、人形劇を演じようとする中で、友達と協力したり、工夫して小道具を作ったことは、相手の気持ちや演じるために何をすべきかを主体的に考えて行動する力を養うことができたと言える。

人形劇遊びは、このように物語を演じながら友達と関わり、物語の内容を人形を遣って自由に表現することによって、言葉や人間関係、表現の領域において発達を促す効果があると言えるのではないだろうか。

④ 2015年11月 9日 (月)、10日 (火)、12日 (木)

調査時間 9日 9:00～10:10 10日 9:00～10:00
12日 9:00～10:10

調査場所 年長 A 組

準備物 人形劇セット (くまの指人形 8 体 作りかけの小道具 絵本) 小道具作りの材料 (プラスチックカップ フェイクファー 和紙 ビジュール 紐 リボン セロハンテープ等) ビデオカメラ

(目的)

友達と人形劇の小道具作りや人形劇遊びを楽しむことにより、どのような発想が生まれるのか、また長期的に保育者が人形劇遊びを通して子どもと関わったことで、子どもの保育者との関わりに変化が見られたかについて調査する。

(方法)

保育室の前方に園児机を設置し、人形劇セット、小道具作りの材料を並べて、子ども達が小道具を作る様子や、人形劇遊びへの関わりについて、どのように発展していくのかを記録した。その際、保育者が子どもと関わりながら、必要に応じて遊びの援助を行った。

(結果)

初日

(表12)

時間	人形に関わる子どもの様子
0:00	男児 B、保育者の様子を見ている。
0:01	「J ちゃんがつくったチケットがここにいっぱいあるよ」と保育者が言うとき女児 J は「何枚だったっけ?」と言って見に来る。男児 A、B が様子を見ている。
0:07	男児 B、着替えて保育者に声を掛け、人形劇の小道具作りに参加する。「どうやってすればいい?」と保育者に聞いている。

0:09	男児B、女児J、材料に触る。男児A、材料を触りにやってくる。
0:11	女児Jが保育者にフェイクファーを手にとり「これさ、つばめの巣にしてみたら？」と言う。女児Jは紐、男児Bはリボンに触っており、男児Bが「これ、優勝した人のメダルみたいだな」と言う。
0:25	男児Cが「これなに？」と言って竹や月へ帰る乗り物の一つずつ手に持ち保育者に尋ねている。保育者も一つずつ答えている。天女を手にとると「知ってるよ、あれでしょ？」と言う。
0:27	女児Oが寄って来る。男児Cが山のことを「何で青なの？」と聞く。保育者が「富士山だかららしい」と答えると「富士山？」と聞き、保育者が「富士山は青いらしい」と答えている。男児Bが「なんで富士山って青なの？白いのもあるよ？」と言う。男児Cが「やし、こんなに三角になってないよ」と言っている。女児Oが「あ、これ光る竹でしょ？」と言っている。
0:28	保育者が「なんだ？この光る竹は？」と台詞を言っていると、男児Aがやってくる。保育者が竹を伐る演技をしていると、男児Bは金の斧を取り出して自分が持っているくまの指人形に持たせて、斧で木を伐る真似をしている。男児Cも真似ようと赤衣装のくまの指人形と銀の斧を持ってくるが、おばあさんの出番になり保育者に渡し、若者役のくまの指人形を持ってくる。
0:29	男児Bが「はなできってやるぞい」と言いながら戻って来る。男児Cが男児Bの人形を斧で斬る振りをする。女児Aが様子を見ている。男児E、Hが寄って来ると女児Aはその場を離れる。男児Eが赤衣装のくまの指人形を持ち「パッカーン、おぎゃあおぎゃあ」と言ったり、斧で竹を振り落したりしている。
0:30	男児Eが赤衣装のくまの指人形を銀の斧で何度も斬っている、保育者が「くまちゃん、お人形村に帰って泣いちゃうよ」と言う。男児Eは斬るのをやめて山を「海」と言って銀の斧で切り、「パッカーン、ビシャッ」と言いながら赤衣装のくまの指人形を出す。男児Hはそれを見ながら笑っている。
0:36	男児Aはくまの指人形を手にはめる。保育者が絵本を見ながら作るものを言うと、男児Cが「はい、石の鉢作る一」と言って道具を取りに行く。男児Aがくまの指人形を手にはめ、斧を持たせて男児Mに振って見せる。
0:39	男児Bがクレヨンを持ってきて「ねえ、これじゃつかないかなあ」と言う。山の上部を塗る様子。(以下省略)

初日は雨のため、普段外遊びをしている男児が小道具作りに参加した。保育者へ家庭で起きた出来事などを話す様子も見られ、自由遊びの時間を共有する中で保育者に心を開いていく様子が見られる。これまで積極的に人形劇遊びに参加していた子ども達は主に参加することはなかったが、一度は様子を見に来たり、声を掛けてくる様子が見られた。この日は小道具作りのみで終了となる。

2日目

(表13)

時間	人形に関わる子どもの様子
0:00	男児B「今日も来たな」「あと何回来るの？」と保育者に話し掛ける。保育者が答える前に「2回？」と言っている。
0:03	女児G、保育者のところへやってきて、昨日欠席した理由を伝えている。
0:10	女児Fが保育者のところへやって来て座る。女児Gは、朝の準備が終わらないまま寄ってくる。

0:15	女児Oが机の上をチェックする。「(音声のみ) あとは何の道具が必要なの？」と言うので、保育者が沢山あったはずの小判がなくなった話をしていると、おたより帳にシールを貼っていた女児Hが振り返り「Aちゃんのロッカーにある、一個！」と言って取りに行く。保育者が小判を持ち「こんなのがいっぱいなかった？」と言っていると、女児Oが「じゃあ作るっか？」と言う。(音声のみ) 女児Hが小判の一つ持ってくる。男児Fが「ねえ、できそう？」と言っている様子。女児Oが「ねえやまちゃん、ジオマグのビー玉を小判にすればいいじゃない？」と言っている。
0:19	女児O、磁石遊具(ジオマグ)の玉を持ってきて、「ねえ、これ小判にしていいい？」と言う。女児Fは「え、それ金じゃないよ」と言い、「これじゃだめだ、これじゃばれる」と言って戻しに行く。女児Hも「バレバレ」と言っている。女児Oは何も言わない。
0:21	男児Fが竹を設置して「ねえ、土はどうする？」と言う。女児Lが着替え終わり参加。青衣装のくまを持つ。男児Fが女児Lに動かし方を教えている。斧を持つのに「小指で挟んで挟んで」と言っている。
0:22	男児Fは何の役をするのか保育者が尋ねると「これ二つ」と言って若者役の人形を両手にはめる。が、保育者が「おじいさん役は誰がやる？」と言うと「知らん」と言いながら女児Gのところへ行き、おじいさん役の人形の使い方を女児Gへ教える。女児Gはエバンゲリオンのイラストが載っている紙をポケットへしまふ。女児Lは保育者に「ねえ、かぐや姫がこれ(扇)持とう」と声を掛けている。
0:23	女児Oが保育者に「映画とか劇とかの時ってさあ、初めに写真は撮らないで下さいとか・・・」と言い、保育者が「あー！撮らないで下さいとか！」と言う。女児Oが説明しているのを聞いて保育者が舞台の前で言ってみるように促し、女児Oが舞台の前に立つ。
0:24	女児Oが「今から劇を始めます。劇を始める前に4つのお約束があります。1つ目、劇には触らないで下さい。2つ目、カメラで写真を撮ったりしないで下さい。3番、ご飯を食べないで下さい。4番・・・」と思い出せずにいると、女児Lが机の下から出てきて「喋らないで下さい」と教える。女児Oが前説をしている間、男児Fは竹を出して動かし「竹が動いてなかなか伐れません」と言ったり、竹を伐る動きをしている。女児Hは笑ったり「伐る木ないやん」と言ったりしている。女児Oの前説が終わり礼をすると、女児Lが「ほら、始まるよ」と言い、男児F、女児Hは準備をする。女児Fはまだ絵本を読んでいたが、絵本を持って移動する。
0:25	人形劇練習1回目スタート。 保育者がナレーションをしていると、女児Fが絵本を持って保育者のところへ来る。続きを女児Fが「ある日おじいさんが竹を伐ろうとしたら……」と読み始める。男児Fは伐る演技をしている。女児Lは竹を持っている。
0:26	女児Fが保育者に次を読むように声を掛け、ナレーションを交代する。女児Hは「パッカーン」と言いながらかぐや姫を出している。
0:27	女児Lは出番ではない若者役の人形を出し、保育者が「まだだよ」と言って下げても投げて出す。寝転んで笑っている。 男児Fはおじいさん役の人形に斧を持たせて「大判小判がざっくざくー」と言っている。 保育者が絵本を見ながら「今度は5人の若者のところだよ」と言うと、男児F、女児F、Lが若者役の人形を持ち、女児Oがおじいさん役とおばあさん役の人形を持った。女児Gは若者役が出るところにエバンゲリオンのイラストが載っている紙を立て、「ねえ、エバンゲリオンが出とうよ、おかしくない？」とアピールしている。

0:28	保育者が「かぐや姫に結婚してくださいと言いました」と言うと、若者役の子ども達が一齐に「結婚してください」「お願いします」等と言ってお辞儀をしながらかぐや姫に人形を近づけ、もみくちゃんになるのを楽しんでいる。
0:30	女兒C、準備を済ませて様子を見ている。場面転換をし、一人ずつ品物を持ってくる。かぐや姫の女兒Hが男児Fの若者の品（石の鉢）に「これは違いまーす」と言う。次の若者の品（真珠の実のなる木）も「これは違いまーす」と言われ、男児Fは「がががーん」と言って人形を下げる。次の女兒Fの若者の品（火鼠の皮衣）は「燃やしてしまいました」と保育者が言う。男児Fがまた「がががーん」と言う。次の女兒Lの若者は海に流され、最後の女兒Lの若者の品（燕の子安貝）は保育者が「なんと燕の糞でした」と言う場面転換をする。
0:33	男児Dが様子を見る。保育者が女兒Gを援助しながら絵本を読み進める。かぐや姫が泣いている訳話しているシーンとなり、女兒Oも男児Fと一緒に「かぐや姫」と言って泣き真似を演じる。男児Fは満月を取り出す。
0:34	女兒Oが片手に月を持っている。女兒Lが真似て小判を持っている。
0:35	かぐや姫と別れるシーンになり、また泣き真似をする。女兒Fが月へ帰る乗り物にかぐや姫を乗せて持ち上げる。飛んで行った後のかぐや姫を男児Jが取り、乗り物を女兒Lが手に取って、「そして、また戻って来ました」と言って舞台の上に置く。男児J、女兒Lが小道具を投げるなどしてはちゃめちゃになり、男児Fが舞台の前へ出て「おーしーまーい」と言う。女兒Fも「はい、もう一回練習！」と仕切り直している。
0:38	男児Fが保育者に「やまちゃん、あと3分しかないよ」と時計を指差して言う。「3分じゃ終わらないよ」と保育者が言う。「じゃあ、ぱぱっと終わらせよう」と言う。女兒Lは山にかぐや姫を乗せるなどして周囲を笑わせる。
0:39	女兒Oが「早く劇やろう」と言いながら保育者のところへ来る。
0:40	男児Fは時間を見ながら焦っている。保育者の肩に両手を乗せて保育者を揺らしながら「あと1分しかないー」と言う。
0:42	男児Fが「はじまりはじまりー」と言い、すぐに「おーしーまい、じゃじゃじゃじゃーん」と言って茶色の布をめくる。女兒Lも手伝って茶色の布で小道具などをくるみ、男児Fと一緒に「おーしーまい！」と言う。男児Fは拍手をしている。

2日目になり、これまでは保育者から声を掛けていたが、男児数名が保育者へ主体的に声を掛けるようになっていく様子が記録されている。初日欠席していた女兒Gも自発的に保育者へ声をかけてくる様子を記録した。また、積極的に人形劇遊びに参加し、主体的に人形劇を披露するための準備をする姿や、人形劇が始まる前のお約束を言う姿なども見られ、人形劇遊びを楽しむ様子が記録できた。話の流れを把握している子ども達は、場面に合わせてアドリブを入れており、女兒Gが好きなアニメの切り抜きを舞台上に置き、登場人物に見立てて友達を笑わせようとしている姿も見られた。この日は最後まで演じ、午後もうやりたいと言う子もいたため、人形を保育室に置いて帰った。

3日目

(表14)

時間	人形に関わる子どもの様子
0:11	女兒C、保育者と話をしている。チケットはどこにあるのか聞いている様子。保育者が「でも本番もうできるの？」と言うと、女兒H、Lが集まって来る。男児Fは「え、何が？かぐやひめ？」と言っている。女兒Hは「どうかなぁ」と言っている。男児Fが「どっちで遊ぶか迷っちゃう」と言い、保育者に「やまちゃん今日が最後？もう来ないの？」と言っている。女兒Lが「12月来て！」と言い、男児Fが「サンタクロースの時に来たらいい」と言って、サンタクロースの劇の話をしている。
0:22	男児Fがおじいさん役とおばあさん役を持ってしゃがみ、1人で人形劇を始める。男児A、女兒Aが様子を見ている。
0:24	男児Fは「じゃあね、また今度やるから」と言って部屋を出た。
0:25	女兒C、H、部屋に戻って来て女兒Cがチケットを机の上で分けている。女兒Cがチケットを交互に渡す話をして、二人でチケットを持ち部屋を出る。
0:33	女兒C、保育者に「かぐや姫しよう」と言う。「一人でやってみたら？やってたらお友達が集まるかもよ？」と声を掛けると、「最初山やろ？」と言って竹を降ろして山を出し、最初の場面にする。小道具をみて「ぺらぺらの紙（おそらく火鼠の皮衣）がない」と言う。
0:34	女兒Cが「じゃあさ、始めようよ」と言う。保育者が「F君は一人でやってみてたよ、好きなようにしてみたいよ？」と声を掛けるが1人では始められない。
0:35	女兒Pが様子を見に来る。
0:36	女兒Cが「全然できんやんか、かぐや姫」と言って机にうつ伏せる。女兒Pも「なかなか来ないねぇ」と言いに来る。（その後ポスターを作ることにになり、やがて片付けの時間になる）
0:47	女兒Hがいつやるのか女兒Cに聞いている様子。女兒Cは「もう無理よ、片付けやけん」と言う。女兒Pが「じゃあ、明日」と言う。女兒Cが「無理、やまちゃん来られんけん」と言う。女兒Hが「ねエやまちゃん今日できる？」と保育者に声を掛ける。保育者は「今日はもうできないんじゃない？」と答える。女兒Hは「でも、やるだけやってみよう」と言う。

最終日は2日目ほど人形劇遊びに意欲的に参加する子がおらず、意欲が持続している女兒C、Hがチケットを作成したり、チケットを配るなどしているが、メンバーが揃わないので演じて遊ぶことができなかった。これまで人形劇遊びに積極的に参加していた男児Fは、一人がかぐや姫が生まれるところを演じて去って行った。最終的には観客の前で演じることはできず、チケットを貰いやってきた子どもが残念そうにしている姿も見られた。最後はポスター作りをすることになるが、片付けの時間となり、達成感を得られる活動にはならなかった。人形劇をやりたい気持ちを保育者へ伝えてくる女兒Cの様子も見られた。

また、先月の活動で人形劇遊びに満足したのか、今月の人形劇遊びには参加しない子が見られた。

(考察)

長期的に筆者が子どもと関わり、人形遊びや人形劇遊

びを持ち込んで一緒に活動したことにより、子どもは保育者へ親しみをもち、調査当初は保育者の名前を呼ぶことはなかったが、11月には「やまちゃん」と呼んで話しかけたりスキンシップをとる行動が見られるようになった。人形劇遊びは筆者が園へやってきて人形を持ち込んだ時のみ開催される遊びであり、普段から環境として存在する遊びではないため、人形劇遊びが自由遊びの時間に定着することはなかったが、逆に、筆者が来たら人形劇遊びをすることができるということは定着した。実際に調査が終わる最終日に女児Cが「無理、やまちゃん来られんけん」と言ったのは、人形劇を演じるためには保育者が必要であると認識しているからであろう。また、女児Cは人形劇遊びに年中時より参加しており、年長時では、強い自己主張はしないものの、自分で役を見つけたり、小道具作りにも積極的に参加していた。保育者に対して意思を言葉で表現することはなかったが、最終日には人形劇遊びをしたいことを保育者へ伝えることができた。これは、人形劇遊びを保育者や友達と一緒に楽しみたいという意志が言葉で表現しようとする力に繋がったと言える。

また、物語に親しみを持って関わり、アドリブを入れて友達を笑わせたりしながら、話を発展させようとする姿が見られたことは、幼稚園教育要領第2章「ねらい及び内容」に記されている領域「言葉」のねらい(3)『日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる』^[4]ことへ、物語を演じるだけでなく、観客を想定して劇場へ見立てる遊びを展開し表現しようとする姿などは、領域「表現」ねらい(2)『感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ』^[5]ことへ、また、友達と協力して人形劇を演じたり小道具作りをすることや、保育者に対して親しみを持つことができたことは、領域「人間関係」のねらい(2)『身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ』^[6]ことを促す効果があると言え、人形劇観劇や人形劇遊びは幼児にとって「言葉」や「人間関係」、「表現」の領域において、幅広く発達を促す効果があるということも明らかになった。

2. 担任へのインタビューからの考察

調査を終え、2015年12月8日に年長A組の担任から今回の調査について話を伺うことができた。担任は、

発表会の前に人形劇遊びを経験し、演じる楽しさとか何かを使って演じる楽しさが客観的に捉える視点から子どもたちに繋がったのではないかなと思う。発表会話

をしている時に、「お客さんが見ていてわからないかも」とか「こうしたらもっと面白いんじゃないか」等の思考が芽生えた可能性があり、もしかしたらこれがひとつのきっかけだったかもしれないと思う。

と話し、人形劇を保育に取り入れることについて、

最近の子は人形を大事にするところからなのかな、と思う。普段から赤ちゃんの人形が裸でボンと置かれているので、生き物として大事にするような環境作りから始めなければならないと思う。家庭での様子も関わってくると思う。善悪の判断において、わかっているつもりで話していてもピントがあってないことがあり、当たり前だと思って話してはいけないと思う。面白おかしく人形に接する際には限度や加減を知る必要がある。友達にとがめられたり、乱暴に扱って人形が壊れる経験をして気付き、心の面も成長していくのではないかなと思う。

と話した。

担任の話の中でも前述した「客観的」視点について語られており、子ども達は人形劇遊びを発表会前に経験したことにより、保育の中で客観的な思考からの発想をすることができたのではないかと考えられる。つまり、人形劇遊びは物語を読み親しんだ上で、演じてみることで、より一層舞台のイメージが膨らみ、発表会において主体的に表現することを促す効果があるのではないだろうか。

人形の取り扱いについては、人形に幼い頃から親しむ経験が必要であること、また、子どもが保育者や保護者から人形で話し掛けてもらう経験が必要ではないかと考える。幼い頃からの経験の積み重ねが人形への親しみを持てるものへと繋がり、人形が動きながら安心できる大人の声で話し掛けることは、子どもにとって心地良いものであり、それが人形へ親しみをもち関わることができることへと繋がるのではないだろうか。

また、担任は人形劇で遊んでいた子ども達について、

普段から切ったり貼ったり作ったりを楽しんでいる子ども達で、「これを作るためにはあれとあれがいる」というのがピンときて、道具を持って来れる。これは普段からやってるからだなと思った。

と話した。この話から人形劇遊びが主に工作の時間に費やされた要因がそこにあることが理解できる。子ども達は保育者が導かなくても創意工夫をして小道具を作ろうとしていたが、人形劇をやってみる際には、保育者が主導となり、話を進めていかなければ演じることが困難であった。これは前述した通り、人形劇が環境として常に

[4] 文部科学省「幼稚園教育要領」2008 7頁

[5] 文部科学省「幼稚園教育要領」2008 8頁

[6] 文部科学省「幼稚園教育要領」2008 4頁

あるものではなく、保育者が来た時にだけ開催される「特別な遊び」であったからであろう。けれど、回数を重ねると人形の使い方を教えたり、演技の指導をする姿が見られるようになった。客観的思考も芽生えており、自発的に客席を想定して演じる姿や、見せ方を工夫する姿も見られるようになったことは、人形劇ならではの効果ではないかと考える。

Ⅲ. 人形及び人形劇を用いた保育について

本研究では、年中時においては人形劇観劇前と後での変化や、観劇後の人形劇を演じてみる様子を、年長時においては人形劇遊びの中で友達と触れ合う姿や劇作りの様子などを総合的に調査・考察したが、年中時においては、人形劇観劇前では人形に対してあまり興味を示さなかった子ども達が観劇後には人形に親しみを持って接しており、実際に人形の遣い方をレクチャーすると、好きな人形を手にとって舞台上で演じることを楽しんだ。年中時では調査日数も少なかったため、人形に親しむ程度の関わりとなったが、短期間であっても子どもの記憶に人形の姿が残り、年長時になって「鳥は?」「だいこん(カブ)は?」と声を掛けてくる子がいたことは、人形劇の観劇体験が子どもにとって心に残る特別な体験であったことが窺える。

年長時においては、指人形によるテーブル人形劇を演じることで、人形の役を考慮し、その役の感情を人形を用いて表現する体験をすることができた。人形劇遊びは劇遊びの場合と違い、劇遊びでは自分が演じ、なりきる体験となるが、人形劇の場合は人形を介するので、自分ではできない行動や言動が見られた。例えば、かぐや姫を演じている時に「5人の若者が結婚してくださいと何度も頭をペコペコ下げる」という演技は人形にさせるから面白いのであって、子ども達が自ら演じるとなると、おそらく照れて表現することはできないであろう。また「おばあさんがかぐや姫に川へ落とされた」と言っておばあさん役のくまの指人形を机の下に落とした行動は、人形だからできたことであり、自分達で演じるとなった場合には生まれない発想であろう。また、「空を飛ぶ」「キスをする」「斧で斬られる」といった表現が見られたが、これらも自分では表現しようとは思わないであろう。これは、松崎(2008)が述べている、

人形を用いて演じることは、自分とは違うもの・役になって、想像力を活発に働かせることに影響を与える。一般化された形象物としての人形が自分の外に存在することは、演技手にとって、日常とのつながりや責任を全く感じずに、自由に性格づけをし

自由に行動することができるのである。^[7]
ということを裏付けるものであると言え、人形劇だからこそ生まれた発想を人形に演じさせることにより、非現実的な物語を演じて遊ぶことを楽しむことができたと言える。

人形劇遊びの中では様々な工夫やアイディアが生まれ、協力する姿が見られた。また、演じる際に役を譲ったり、手伝ったり、自分で役を見付けたりしながら、人形劇遊びを楽しむ姿が見られた。このような活動をしながら友達や保育者と一緒に作り上げる体験や、アイディアを認められて褒められる経験は、協調性や信頼感を養い、自己肯定感を育てることに繋がると言える。また、客席を想定した遊びも展開し、客観的思考が芽生えたことは人形劇遊びがもたらした効果であり、自己中心性を持つ幼児にとって客観的思考を発達させることは、社会性を身につけることへも繋がると言える。また、7月の調査を始めた時と11月の調査とを比較すると、子ども達は人形劇遊びに関わった保育者へ親しみを持てるようになっていた。このことは、人形でコミュニケーションを取ったことをきっかけとしていることから、保育者が人形を保育に用いることは子どもが保育者へ親しみをもちやすくなると言え、保育者が子どもと人形遊びや人形劇遊びをすることは親近感や信頼感を持つことができたことから、人形遊びや人形劇遊びは保育において子どもの心を育む有効な児童文化財と言えるのではないだろうか。

Ⅳ. おわりに

本研究では、実際に保育に人形遊びを持ち込んで考察を行った結果、人形遊びは幼児にとって「言葉」や「人間関係」、「表現」の領域において、幅広く発達を促す効果があるということが明らかになった。しかし、本研究は限られた時間の中で調査を行ったため、時間の感覚が未発達で見通しが立てられない子ども達において、子どもの主体的活動に寄り添う中で、保育者が見通しを立ててやり、声掛け等により目的を達成させてやる必要があることも明らかとなった。細切れな自由遊びの時間で集中力は持続しないという姿も見られ、自由遊びの子どもの遊びは思う存分自由に遊んでいると言い難い様子が窺えた。このことから、人形劇遊びを保育へ取り入れるには、やはり保育の中で人形や物語に親しむ経験を積み重ねていく必要があり、経験が少ない場合は保育者が子どもの主体的行動を妨げないような間接的主導や援助を行なう必要があると言える。

また、人形との関わり方については、担任も「人形を普段から生き物として大事にするような環境作りから始

[7] 松崎行代 前掲 68頁

めなければならないと思う」と話していたが、最初から「可愛い!」と飛びつく女兒もいれば、叩いたり投げたりと攻撃的な関わりをする男児もいた。いずれにせよどちらも人形とは関わりたい気持ちがあるのは事実である。その表現方法が様々であるのだが、人形を大切に思う気持ちを育むためには、やはり人形が動く姿を見たり、大人が人形を遣って子どもへ話しかけたりすることにより、疑似的に人形への命を感じ、思いやる気持ちを育むことが必要ではないかと考える。実際に、人形劇遊びに参加した子ども達は酷い取り扱いをすることはなかったが、通りすがりに関わる子どもの中には乱暴に接する子がいた。これは、人形劇遊びに参加した子ども達は、人形で遊び続けたことにより、人形に親しみを持つようになっていったと考えることもできるだろう。

今後は断片的な調査ではなく継続的な調査、あるいは他の幼稚園・保育園において調査を続けて行くことにより、保育における人形遊びや人形劇遊びの可能性を探って行きたい。また、保育に取り入れることが子どもの心の育ちを豊かにすることができるのか、あるいは別の効果が生まれるのかなど、他の児童文化財との比較も考慮しながら研究を続けていきたい。

謝 辞

本研究の実践にあたり、ご協力頂いた中村学園大学付属あさひ幼稚園の先生方に心より感謝申し上げます。